

与謝野

歌碑句碑

文学 ゆかりの地を巡る。



蕪村・礼厳・
鉄幹・晶子、そして。

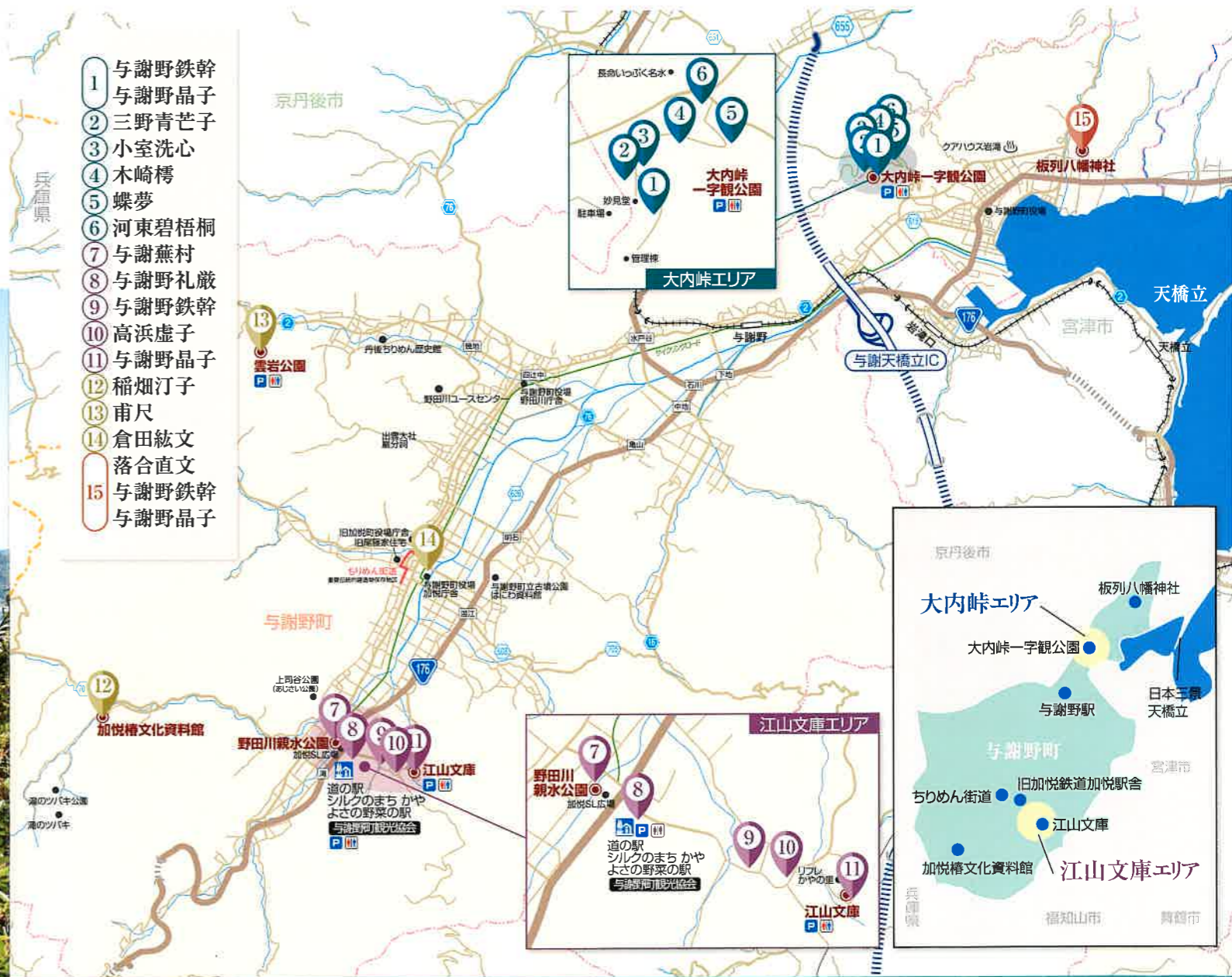
与謝野鉄幹・晶子夫妻が詠んだ「与謝野」



鉄幹・晶子夫妻の苗字「与謝野」のルーツがこの与謝野町にあります。

またここは夫妻を始め、多くの歌人・俳人が訪れて歌や句を詠んだ場所でもあり、その名残は歌碑や句碑として現存しています。その歌や句が詠まれたであろう場所に存在するものも多く、歌碑や句碑を訪ね歩けば、歌人・俳人たちが見た風景を追体験できます。

与謝野町の歴史・風景とともに歌碑や句碑めぐりを楽しめば、歌や句に込められた意味や情景を肌で感じながら、この地の魅力を知ることができるのではないでしょうか。



文豪たちが愛したまち「与謝野」

その昔、たくさんの文豪たちが京都・丹後の与謝野を訪れ、多くの短歌・俳句を詠みました。「与謝野」には彼らを魅了した風景が多々あったのだと思います。その足跡をたどりながら、文豪たちに思いを馳せてみませんか？

丹波の加悦といふ所にて
夏河を越すうれしきよ手に草履

与謝蕪村



江戸時代中期の俳人、与謝蕪村は宝暦四年(一七五四)に丹後を訪れ、当地で右の俳句を残しました。与謝野町は蕪村の母親の生地であるとする伝承があります。こうした伝承から、蕪村の夏河の俳句は、亡き母と過ごした少年時代への憧憬を織り込んで、しばしば次のように解釈されます。

夏の暑い中を歩いてみると川の前にやってきた。対岸へ渡りたいが、見回すと近くに橋もなさそうだし。そこで草履を脱いで両手にぶら下げ、素足で川の中にじゃぶじゃぶと入っていった。流れに流れる足の冷たさはとても気持ちよく、こうしてしていると子供の頃に裸足で川遊びをしたことなどを思い出して、我ががら何とも嬉しい心持になってくる。

前書きの「丹波」は「丹後」の誤りとされています。「加悦といふ所にて」と続くことから、「夏河」とは、町内を流れる野田川ではないかと言われています。



蕪村の屏風「方士求不死薬圖」(二右隻) 施業寺蔵
俳句と絵画の両方に通じた与謝蕪村が丹後滞在中に描いたとされる作品です。例年11月3日にのみ同寺で一般公開されます。

滝地区

見も聞きも涙ぐまれて帰るにも
心ぞ残る 与謝のふるさと

与謝野礼蔵



与謝野鉄幹の父として名高い与謝野町出身の僧侶 歌人・与謝野礼蔵の作品。「礼蔵法師歌集」によれば前書きがあり、「明治二十五年の春、久しくまからざりし丹後國の与謝に下りて」の記述から、当地で詠まれた歌と分かります。

生れ故郷の与謝の里にしばらくぶりに戻ってみれば、何を見、何を聞いてもすべてがなつかしく、溢れ出す望郷の涙を禁じえない。今となってはこの地を離れ、遠き土地に居を構え枕を置けども、やはり心に残しているこの与謝こそ、私のふるさとなのだ。

当時69歳の礼蔵はこの地で過ごした少年時代に思いを馳せ、何に涙したのでしょうか。故郷への切なる思いにみちみちているような歌です。



礼蔵法師追念碑
僧侶として、明治新政府による各種公益事業等に奔走した礼蔵は、死後の大正六年に従五位に叙せられ、昭和六年には地元有志により生前の功績を讃える追念碑が建立されました。追念碑の除幕式には、息子鉄幹も東京から駆け付け出席しています。

温江地区大虫神社前

大内峠エリア

海山の青きが中に 螺鈿おく
峠の裾の岩瀧の町

与謝野晶子



空の青さに海も山も溶け込み、景色が青一色となる薄暮れどき、裾野を見下ろせば岩瀧の町並みが、あたかも螺鈿細工のようにさらさらと輝いて、海山の青と美しい対照をなしている。

昭和五年五月に丹後を訪れた夫妻は、ここ大内峠で多くの歌を詠みました。この町の美しさに感嘆した様子が、今日の眺望と碑に刻まれた文字、そして歌から伝わってくるようです。

大内峠一字観公園内の妙見堂の傍らに、与謝野町ゆかりの歌人、与謝野鉄幹・晶子夫妻の歌碑が残っています。本のしおりを模した石碑の一方の面には鉄幹の短歌が、他方には晶子の短歌が刻まれています。鉄幹、晶子の歌が並んだ歌碑は全国に存在していますが、両面に刻まれている例はまれです。

たのしみは大内峠にきはまりぬ
まるき入江とひとすぢの松

与謝野鉄幹

橋立の見方、楽しみ方はさまざまであるが、極めつけはなんといっても大内峠からの眺望であろう。丸く弧を描く阿蘇海の入江の中にただ一筋、松の緑に彩られた橋立が真一文字に走る様は、簡素であるがゆえに、足す物も省く物も無い美しさがある。

与謝野の文学に触れる

こうさん おんこ
与謝野町立 江山文庫

与謝野礼蔵や鉄幹、晶子などの与謝野町ゆかりの歌人や、高浜虚子、山口誓子といった俳人たちの短歌や俳句に関する掛け軸や短冊など、所蔵する作品点数は3000を超えます。企画展をはじめ、蕪村顕彰全国俳句大会の開催など、一年を通して、さまざまな地域文化を発信しています。

与謝野町字金屋1682
☎0772-43-2180
http://www.kyt-net.jp/kozan/
10:00~17:00
月曜日(祝日の場合は翌日) 年末年始

歌碑句碑の詳しい内容は
こちらからご覧ください。

与謝野日々是



飛ぶ雲に秋の日ひかりそのもとに
大江の山のもれるうすべに

与謝野鉄幹



昭和六年十一月の作品。このとき与謝野鉄幹は、父・与謝野礼蔵法師の追念碑除幕式に出席するため、父親の面影が残る当地を訪れました。

真夏に比べ低くなった陽光が空の雲にあたって光り輝いている。その空のもとには大江山連峰が広がり、山脈一面がこれまた紅葉によって薄紅色に輝いている。

大江山の秋の美しさを、その空の色との調和の中でうたっています。

西山荘



西山荘とは、加悦の大規模機業場の経営者で俳人でもあった杉本治助が自邸内に設けた隠居所のことで、同邸を訪れた河東碧梧桐の命名によると云います。色紙の「西山荘即事」の記述に、碧梧桐のみならず鉄幹もここに招かれ、歌を詠んだことがわかります。

ちりめん街道内西山工場

ひんがしに日の沈みをる 花野哉

高浜虚子

いと細く香煙のごとあてやかに
しだれざくららの枝の重る

与謝野晶子



板列八幡神社



男山の板列八幡神社の境内には、与謝野町ゆかりの歌人、与謝野鉄幹・晶子夫妻と、鉄幹の師でもあった歌人・国文学者の落合直文の三人の歌を刻んだ歌碑が残っています。直文の歌が明治三十二年、鉄幹・晶子夫妻の歌が昭和五年と、歌の制作年代が異なります。

ふるさとの我が松島に比べ見む
朝霧晴れよ天の橋立

落合直文

御柱にわが師の名のみ残るにも
ぬかづき申す岩滝の宮

与謝野鉄幹

海の気と山の雪の石濡るる
八幡の神の与謝の御社

与謝野晶子

旧加悦鉄道加悦駅舎前

加悦谷の畦を重ねて 草紅葉

倉田絃文

雲岩公園

岩むろに一夜籠らむ霜の声

甫尺

加悦椿文化資料館前

千年の心つなぎて 黒椿

稲畑汀子



橋立も絹織る町も紅葉越し 三野青芒子

橋立の陰晴須臾や秋の海 小室洗心

一ひけばまづそれでよし松六里 木崎樗

はし立や松を時雨の越んとす 蝶夢

大内峠 小春雲 綿と飛ぶ松沈むかと 河東碧梧桐